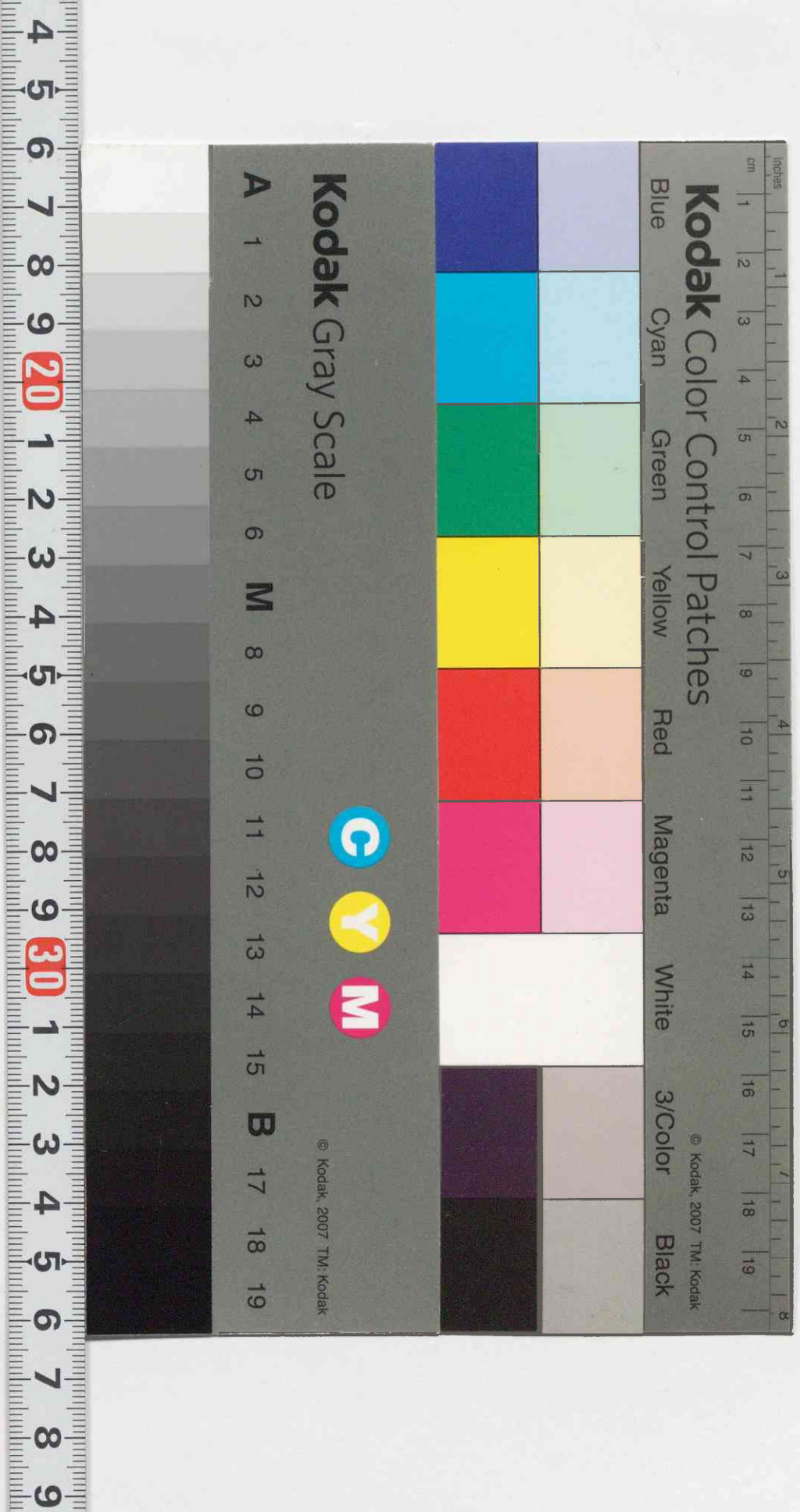




曲亭馬琴著

八犬傳

東京名山閣版

八犬士傳第二輯自序



稗官新奇之談嘗含畜作者胃臆初
攷索種々因果無一獲焉則茫乎不
知心之所適譬如泛扁舟以濟中蒼海
既而得意則栩栩然獨自樂視人之
所未見識人之所未知而治亂得失
莫不敢載焉世態情致莫不敢寫焉

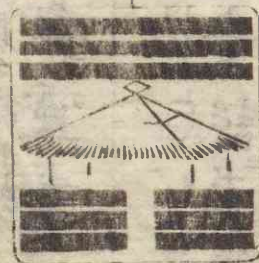
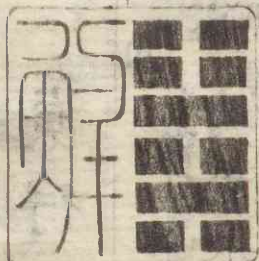


排纂稍久。卒成冊。猶彼舶人。漂泊數
千里。至一海嶋。邂逅不死之人。學仙
得貨。歸來告之于人間也。然如乘槎
桃源故事。衆人不信之。當時以為浪
說。唯好事者喜之。不敢問其虛實。傳
迨數百年。則文人詩客。風詠之後。人
亦復吟哦而不疑。嗚乎。書也者。寔不
可信。而信與不信有之。自國史絕筆。
小說野乘出焉。不啻五車而已。屋下
加屋。當今最為盛。而其言詼諧。甘如
飴蜜。是以讀者終日而不足。秉燭猶
無飽焉。然益於其好者。幾稀矣。又與
夫煙草能醉人。竟無充飲食藥餌者。
無以異也。嗚乎。書也者。寔不可信。而

信與不信有之。信言不美。可以敬言。後
學美言不信。可以娛婦幼。儻由正史
以評稗史。乃圓器方底而已。雖俗子
固知其難合。苟不與史合者。誰能信
之。既已不信。猶且讀之。雖好亦何咎
焉。予每歲所著小說。皆以此意。頃八
犬士傳嗣次。及刻成書。賈復乞序辭。
於其編因述此事。以塞責云。

文化十三年丙子仲秋閏月望。抽毫
於著作堂南牕。木樨花蔭。

簑笠陳人解識



南總里見八大傳第二輯總目錄

卷之壹 第十一回

仙翁夢葉富山 負行暗獻靈書

同卷 第十二回

富山洞畜生發菩提心 祈流水神童說未來果

卷之貳 第十三回

遺尺素因果自訟 拂雲霧妖孽肇休

同卷 第十四回

飛轎使妾涉溪澗 鳴錫大索記總

卷之三 第十五回

金蓮寺番作擊讐 北華庵手束留客

同卷 第十六回

白刃下鸞鳥鳳結良緣 天女廟夫妻祈子

卷之肆 第十七回

逞妬忌墓六求螟蛉 固孝心信乃襖曝布

同卷 第十八回

熊川原紀二郎隕命 莊官舍與四郎被瘋

卷之伍 第十九回

龜條姦計賺糠助 番作遠謀托孤兒

同卷 第二十回

一雙玉兒結義 三尺童子述志

統計二十四回其第一回迄第十回既錄于肇輯第一卷

酔ぬとふらぬ其の花さうに
さうも肩ゆかりてをゆく

龜條



五條

犬塚番作

春風の
やい
なま
さう
らむ

ひさ







卷舒在手雖無定
用舍由人却有切

三保谷の
幸徳小
仙の破傘
風ふき
まじり
て

上田土太郎

上田土太郎



愛野加太郎

板野基郎

演略

渠も富山へ入りしより終くその安否をきき世のゆえ人の誠を隙を
るにまづくふ。と悔くも思召と然きも出のつど彼溪洞は路終く
こふ方なるのめはさる親も一切あせせとさる樵夫獵人ふんく
このあるもさる親胞兄弟は遭へり。ハハハはゆく恥しきるふ。と
思ひまづ累る八國中は殉あうく。元良賤士庶をいりむ山拵まのあり
とも。件の小ふ登る上は折さる。とりの音も背くめ。の必首を刎んと
捉させぬもの亦生憎めあさるゆゑ。みづろはあつりのハ金碗大捕孝徳
る。渠へ安西景建は兵根を借んとく。苟ふ出くゆたし。今ふそのな
あきと謀れて擒とるる。あ果敢るく今死にけり。さる陣はあつ
るべ。功ありるが。賞祿辞し腹切く。とさける。親孝吉を禁めあへ
末期は誓ひしとあま。いそこの子と。城の主もせん女壻ふとせへ

多ひゆふ化るる。さるせぬめ。人の入る盈る。虧る月をうても去歲は
今年をしのぐ。と。あ果る渠の。いふる。と。さる人。は。同へさ
る。あ子。は。迷ふ親の常間。は。さる。照る。と。さる。あ
あ。現。百。騎。の。敵。と。ん。く。も。屑。と。せ。り。け。智。仁。勇。の。三。徳。を。兼。む。ゆ。へ
大將と。さ。入。る。さ。小。術。あ。う。く。く。ま。で。さ。ひ。屈。く。あ。バ。は。は。笑。の。夫。人。五。十
子。は。その。月。その。日。伏。姫。は。別。き。く。さ。の。面。貌。の。と。只。目。ふ。そ。ひ。て。泣。く。と。さ
明。く。あ。ひ。つ。渠。さ。る。く。あ。せ。ぬ。め。あ。る。日。ふ。あ。せ。ぬ。と。神。は。佛。ふ。く。編。
うち。合。さ。る。さ。も。指。り。知。り。く。朝。夕。の。着。と。さ。る。も。懶。け。は。手。解。も。さ。ま。を
あ。ひ。バ。臂。ち。ふ。使。る。専。ら。房。り。共。は。あ。ん。理。と。さ。る。と。の。と。さ。る。慰。ん
よ。も。る。く。あ。の。く。心。鬼。う。く。富。山。の。奥。ふ。け。登。る。姫。入。の。あ。ん。所。在。を
遂。さ。る。う。く。さ。る。と。さ。る。と。さ。る。の。び。く。は。相。譚。ひ。つ。行。者。の。石。窟。へ。代。ふ。と。い。ひ

あつて彼山は北きく。おぼつてくも伏姫を索す。わらうと云ふ。あつて。こ
中ふたあり。山道の遠くふらふ。登る。かの麓より還る。あつて。手
末武家。給事。いさる雄。うたの。郷導者。先。か。う。て。亭。く
とけ。お。う。番。崎。上。郎。輝。試。が。推。流。さ。う。と。い。ふ。山。川。の。あ。う。こ。へ。を。郷
導者。も。あ。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
音。あ。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
席。は。坐。る。あ。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
こ。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
け。は。さ。う。と。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
と。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
畜。の。生。を。隔。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く

焦。う。て。物。を。さ。う。と。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
故。う。て。後。竟。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
欲。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
欲。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
え。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
傳。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
ホ。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
向。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
ま。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
は。五。日。強。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く
つ。う。て。い。さ。る。雄。う。た。の。郷導者。先。か。う。て。亭。く

本則殿の所放書より襟小掛より衣蓋より解かりく廻らせり。某并
 見はる小翁口状も符合する。不審なるも疑ふところ。件の公卿を之と
 みて馬に鞍あはせり。乗る。後者のつく人俣を夜を先途をいそがし
 神館よりあつてうけり。つづき解みる案は相違せり。原来彼翁を癖者ふ
 極む。とて人ともやどく。を所放書へよふ。あつて。とて商せと懐中より
 ぞう出て返り。す。不審なるや。とうち拍きこむ。いふ。と負ひ。かふ。引
 向く。つづき。自れ。再。い。ち。驚き。現某が。さ。み。え。く。文字。あ。ふ。印。え。も
 ろ。如是畜生。獲。菩提心。と。二行八字。と。変ぜ。る。奇。入。奇。る。り。と。さ。る。ふ。采
 る。王。半。响。あ。り。又。い。ふ。り。も。あ。る。り。けり。後。某。ハ。この。一句。は。忽。地。曉。り。て。さ。る。い。こ。え。ん。
 衆。人。は。か。や。う。と。所。傳。る。く。不。思。議。の。こ。り。入。抑。さ。る。の。使。者。と。給。て。て。の。書。と。廻
 る。けり。手。替。の。面。紙。へ。い。の。め。り。と。坪。は。吉。と。と。室。入。負。ひ。差。る。氣。あ。る。く。

付の公卿八十あり。百とある。も。乃。く。一。首。は。長。く。綿。花。を。重。く。さ。く。齒。を。皓。く。て。
 執。枝。を。連。た。る。小。異。る。く。疲。れ。疲。れ。も。健。之。老。と。と。ん。ま。い。と。弱。く。眼。光
 人を射て威あ。と。い。も。猛。う。く。ど。よ。い。み。道。顔。仙。骨。と。果。る。く。と。さ。る。と。あ。ど。
 義。実。ハ。あ。る。も。當。下。と。拍。あ。つ。も。似。る。奇。終。あり。そ。の。疑。ふ。り。も。あ。る。も。
 洲崎の山。小。述。重。の。役。行。者。の。示。現。人。且。ち。め。り。告。ん。と。て。夫。人。は。諾。ひ。め。り。
 伏。姫。の。女。否。を。飛。ぶ。る。り。又。長。成。の。孝。心。勇。氣。あ。ひ。つ。と。く。人。い。ま。富。山。の
 奥。の。あ。つ。る。岸。は。遊。び。く。さ。る。小。翁。は。遭。一。緯。の。趣。首。尾。を。説。き。き。あ。ハ
 五。臟。の。疲。勞。は。成。る。頼。む。足。く。ど。と。い。ひ。が。只。今。汝。が。や。う。く。つ。る。翁。の。面。紙。つ。る
 愛。ふ。と。え。つ。る。め。と。紡。糸。加。海。如。是。畜。生。云。云。の。八。字。と。り。と。過。去。未。來。と
 示。せ。る。伏。姫。禪。々。は。と。き。病。り。く。嘆。息。と。え。ん。と。さ。る。小。洲。崎。の。山。崎。の。後
 行。者。の。利。益。は。よ。り。て。後。健。は。生。育。め。る。の。折。は。感。得。せ。り。水。晶。の。宝。珠。ハ。仁

義礼智忠信孝悌の八の文字あり。この後龜城難義の折。一言乃失
め。姫を八房に許せ。日伴の八字は消滅。いづれ復ふ。如是畜生幾度喜提
心と読ま。因る。女ハ嘉吉二年夏の季。伏日の比生。いふ名を伏
姫と喚做せ。後竟ふ人。うく犬。後ハ名詮自性を。將脱。因る。因果。人。
果を棄る。縁故ハ親の爲。國の爲。仁義ハ行を世の。入。要。いふ。る。
も。苦節義信の善果。より。如是畜生。法門。遂。成等正覺。入。る。
の。ぞ。あ。ん。と。い。ふ。め。て。曉。け。不。敢。復。姫。を。禁。め。ん。
渠。望。小。任。せ。と。二。年。の。間。い。ふ。事。も。安。否。を。訪。む。訊。せ。せ。と。想。夫
揭。ハ。小。ま。い。彼。山。入。る。を。禁。め。今。五。十。子。が。疾。病。危。く。も。情。愿。乃。默。止
か。姫。の。安。否。を。も。と。め。と。い。ふ。難。つ。予。が。夢。い。
翁。の。面。影。こ。の。書。を。汝。に。せ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。一。点。と。い。ふ。と。は。裕。と。い。ひ。恰。と。い。ひ。

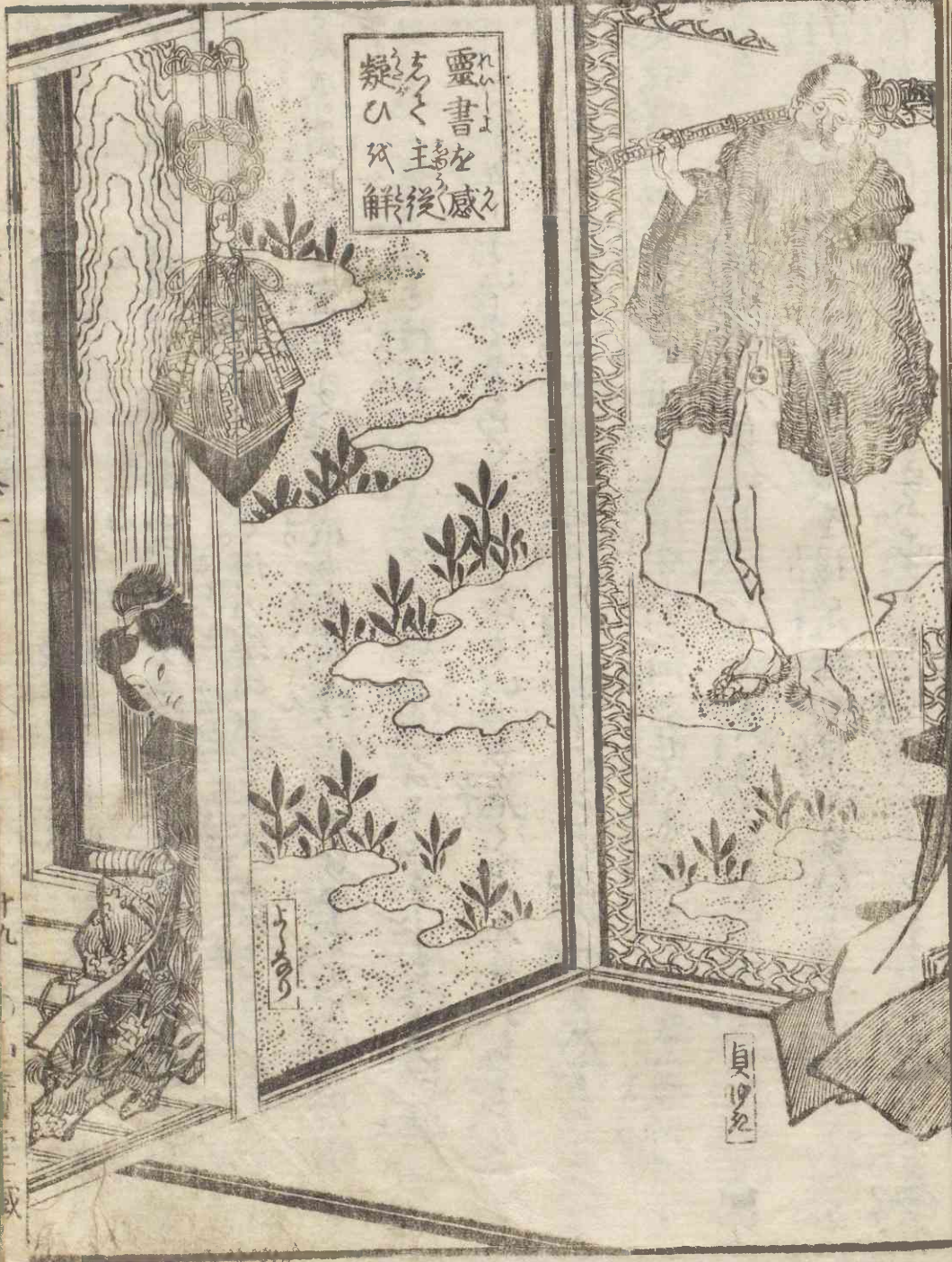
神変不測の應驗。う。長。冥。が。疑。惑。解。け。富。山。の。奥。導。き。行。者。の。示。現
疑。ふ。は。是。法。度。を。復。し。我。意。を。枉。て。伏。姫。は。再。會。の。時。到。り。則。權
者。の。示。現。は。任。に。汝。を。め。と。い。ふ。こ。の。ハ。沙。汰。ま。い。人。ハ。唯。奇。を。好。む
の。示。現。靈。應。想。い。と。い。ふ。姫。は。あ。い。と。あ。い。民。喋。と。奇。を。談。い。と。
と。鬼。神。の。徳。或。淫。入。又。彼。山。は。お。と。い。ふ。と。終。伏。姫。は。あ。い。と。い。ふ。夢。
信。と。影。を。逐。ひ。假。を。認。風。を。捕。る。義。實。が。愚。を。民。知。く。と。世。の。胡。慮。
あ。い。と。い。ふ。大。約。此。度。の。後。者。ハ。汝。が。外。ハ。列。率。十。五。人。と。い。ふ。と。い。ふ。言。
寡。さ。の。の。ろ。ろ。老。實。ろ。ろ。採。擇。べ。い。翌。つ。と。め。と。い。ふ。と。出。る。人。准。備。を。せ。い。
と。且。示。且。命。い。ふ。自。身。が。威。佩。あ。く。敢。復。一。強。は。及。ば。既。に。と。示。し。
姫。ハ。幻。擇。と。い。ふ。時。役。行。者。の。靈。驗。利。益。彼。水。晶。の。珠。数。の。い。ふ。と。其。も。粗
ま。い。此。度。の。奇。特。は。符。合。と。思。召。合。さ。と。い。ふ。亦。但。君。が。言。を。い。ふ。



如是
發菩提心

貞久

靈書を
主として
疑ひ解後



うさぎ

第二回

富山の洞は畜生菩提心を獲と
流水は流る神童未来果を説く

燭世煩悩色欲界維五塵の火宅を脱る祇園精舎の鐘の声は諸行
无常の響あまの飽きざるを始むのハ後朝の別は成惜ひが故は只
とてかしの誓と一僧の沙羅雙樹の花のさへ盛者必衰の理は成説とも
徒小香を愛するのハ風雨の過るをを如く故は偏は近年の春を契とる
觀むるハ夢の世親せむるも亦夢の世は孰れ幻るをを思ひ内ふある
のハ龍華の二會は値ふといふも凡夫出離の直路をを覺て復
悟るのハ虎穴龍潭小存りとといふも瑜伽成就の快楽まうり妙すふ
世を思ひ捨る富山の奥は二とせの春と秋と送るるを思ひ見治部
大補義實のハ思ひ成親のハ又國の爲は言の信を黎民は失の世と

身を捨るハ房の犬は伴且山道を描く入り成隱世後ハ入訪を山序の植生と
山川の映山の洞は真管敷臥房定めり冬籠り春去来ハ朝鳥の交々
頃ハ八重霞高峯の花と云々ありハ弥生ハ里の雛遊び垂髪少女が水
成二人双居今朝で摘む名もあうき母子草維揚とありハ口の餅は
あまの菱歌の尻掛石の膚あまの稍暖死苔衣脱るえ流とも夏乃夜
秋涼ハ松風は揺らハ父老の雨は流るハ乾を髪の蓬が下ハ鳴虫乃
秋とあまのささるハ谷ののちハ果織映ハ錦の床も假寐の宿とあまの
鹿ぞ鳴く水澤の時雨宵回るき果ハ其処ともあまの雪ふ岩がハ枕角とれて
真木も正木も花ぞさく四時の眺望ハありあうきハひくハ處ハ自物
膝折布ハ外ハ立ハ後ハ世の爲とあまの経文続編書等の功日数
とあまの由憂ハ刺つ憂ハとせと浮世のハハ使ハるハ奴ハるハ音響の

声々二念希求の友とて心操を殊勝の道より先入る伏姫を
脊小乗とこの山に入りしとん廣に流水を帯めし山峡は洞あり石門
かのづゝ鑿めし彫るに松柏西止は後身と牆をせりこの洞南面
まてその裡も亦周る大なる住り前足折て伏し多れ姫とを
意を睡りし後より立ててふ小昔も住る人やありえ裡ある離
る圓坐と焼捨と灰とる小強り世に捨つ世に捨つる山の山
のりある人の小身とるあふととて進み入りしを伏し
半を占めし人の姫の傍より満田の雲を吐くは法華経八軸と料紙硯
刃と放る此れも持来りこの夜月下小続経とおほつる
明く彼感得り水晶の珠散り散る今も襟はあふ慈心寺の傳佛
擁護の人の言語を大なるとせり人々といふこの言はれ

賺しく深山の奥へ伴ひ来る飲さども情欲の不覚は幾とあふ遂は
そえの誓ひを忘る入姫心決てくふ身小近づてあふ主を欺くの罪
渠はあり只下刀小刺殺えんと必ひ決てうち騒ぐ胸を鎮て潜す護身
刀の袋の緒と解捨と右より引著くと又続経とくくくあふその氣を
知りけへ入る進むもゆるむと只物とと姫の顔を臥くく又起くる
舌を吐くを流し或は舌を吐く自見と旅り只喘ぐと頻るくくくつめく
明くその日八房とく起て谷より下り木果蔽根と来て街を来て姫君と
わたりまると焦地とると一日も懈らむけふと暮し翌と明く百日あふ
後八房へつとく続経の声と耳を傾け必ひ澄せらるのく復れへ
眷らむ伏姫のひあふや彼因寺の牛仏に載り栄花物語峯の月乃
巻に在りしや又犬の梵音を放つる古れ草紙は数るやあり佛の

慈悲ハ穢土穢物を帰ひらる。さる天飛ぶ。地次なる。草葉小取。夜く
虫江河の蟬め。悉皆成佛はる。今この大が欲と忘れて。経
経の音を聴く。如く入帰の友とる。皆ん経の威力ふ。行
釋元時。吾侪のくせを示させ。ひく。役行者の冥助。最
そひとて。いづく。流経を急。早る。珠数を。採る。選
例崎の。祈念。又ある。父母の。念。経の。偈文。を。騰。写。く。
前。山川。お。流。る。春花。を。折。く。佛。の。向。なり。秋。入。る。月。小。唄。で。坐。
西天。を。意。め。り。さる。山。果。露。は。落。く。朝。三。の。食。秋。風。は。飽。き。柴。火。爐。は。宿。り。
夜。薄。の。衣。寒。れ。火。防。ぐ。八。世。山。嶺。け。とも。嶺。を。首。陽。は。折。る。の。怨。なく。
岩。窓。小。梅。遅。け。とも。嫁。く。胡。語。を。学。ぶ。の。悲。とる。姫。ハ。元。年。二十。小。満。む。
客。頼。固。より。王。を。欺。く。巫。山。の。神。女。の。雲。と。る。夢。の。面。影。を。留。め。小。野。

小町。元。凡。に。秋。の。風。情。を。残。せ。り。金。屋。の。内。雞。障。の。下。小。養。と。る。ひ。日。更。あ。り。
い。今。山。居。久。く。衣。裳。ハ。垢。つ。た。破。れ。と。れ。とも。肌。膚。も。残。雪。より。
皓。く。雪。髪。梳。け。は。由。る。とも。緑。鬢。春。花。より。芳。く。細。腰。い。く。瘦。で。風。
堪。る。柳。の。玉。指。を。細。り。く。色。は。惱。る。筆。み。似。たり。その。素。性。を。い。ふ。
と。る。安。房。の。團。主。里。見。氏。の。嫡。女。と。る。心。操。と。論。へ。横。佩。み。息。女。中。將。姫。
み。も。懐。と。る。草。書。入。讀。書。ハ。父。の。才。を。承。て。お。つ。理。義。も。判。断。く。判。断。又。
管。絃。ハ。世。君。の。小。習。せ。と。る。その。調。い。と。妙。入。り。も。愛。た。れ。未。通。女。と。る。
中。と。い。う。は。月。下。翁。は。妬。ま。て。非。類。の。八。房。小。伴。と。る。小。残。ま。り。一。た。と。る。
と。る。の。精。細。は。字。と。出。と。る。筆。法。り。心。痛。ま。當時。の。光。景。想。像。に。
さ。は。程。み。と。る。年。ハ。暮。る。岸。の。小。草。漸。萌。出。谷。の。樹。芽。も。翠。を。お。ひ。凡。有。一。日。伏。
姫。ハ。硯。水。を。滴。入。と。る。出。て。石。瀉。を。掬。め。横。走。せ。止。水。と。る。影。入。

草花を
 伏姫神
 童小あふ

八天傳二軍卷



伏姫

義實朝臣を怒るとありぬ。空しく一集の犬とありぬ。かへり親子と辱む。
 是則宿内つる果と何ぞや。八房既ちあん力を獲て遂にちん力を犯す。
 法華經梵彌の功德ふやうく。ちん力その風怒を散し。共は菩提心と度ふ。
 る。今かへの子を遣せり。八房の八を象と。又法華經の卷の数を。
 夫萬率へいとぬき。一將に轉く得る。ちん力其子に。
 勇心秀忠信節操里見を佐けて威を八州に。ちん力其子に。
 今と誰かその母を拙しとせん。是則善果に抑禍福を。ちん力其子に。
 今の禍を。後の福ひる。ちん力其子に。
 汚穢に潔白と成る。ちん力其子に。
 隠しに。顯しに。ちん力其子に。
 懷胎六十日入に懷胎十月入に。畜その差ありと。ちん力其子に。

ちんちんが懐胎六個月との月すくその子産まし。その産む時すくすく。
 親と夫ふあひ多し。是より已前ハ未来未来果えあなりふ言を詳おせば天機
 漏とのちをとり。こが後ふ又入あきて。その子のうへみあつとあはしうへも
 是やせり。秋の日の影の短れは長りのより鳴呼ありとこそるこが師のおも
 ありんよ。そやううんと。いひうけく。牛の鼻つゝ掌に山川へさし通ひ入る。
 殊とといふ玉う。影ハ秋露は立籠らして。往方もあきとありふけり。

